石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第496号　令和7年2月1日発行

特別陳列 彩塑人形・紺谷力
―躍動する生命（いのち）―【近現代工芸】

紺谷力《彩塑人形「神事鵜祭」》
―特別陳列「彩塑人形・紺谷力―躍動する生命―」より―

天神画像と文房具【前田育徳会尊經閣文庫分館】

浮世絵にみる魑魅魍魎【古美術】

優品選【近現代絵画・彫刻】

- 展覧会回顧　特別展　「食を彩る工芸」
- 友の会ツアー報告
- 2月の行事予定
- 対話で！作品鑑賞会
- 友の会予告
- アラカルト ただいま展示中

近現代工芸（第5展示室）

特別陳列 彩塑人形・紺谷力 －躍動する生命（いのち）－

2月8日（土）～3月20日（木・祝）　会期中無休

日本では古来より、木や紙などで作った「ひとがた」に、病気などの災いを負わせて焚き上げ、川や海に流すことで、厄を祓う風習があります。人のかたちを写し、その人の魂を映した身代わりとなるもの―「人形」が、日本では伝統的な工芸技術や素材を用いて作られるものであり、こどもの「Ｔｏｙ（おもちゃ）」のみならず工芸品でもあることは、このような背景に由来しています。

金沢市で活動した人形作家・紺谷力（こんたにつとむ）の作る人形の多くは、いわゆる塑土、粘土でモデリングする土人形です。木や紙と同じく、古くから人形に用いられてきた素材を、現代の素材と合わせて独自の工夫で堅牢に仕上げました。

紺谷力は昭和16年（１９４１）金沢市に生まれました。木彫人形作家の下口宗美に師事し、木彫、桐塑など人形の基本を学んだ後、特に塑造彩色技法について研究し工夫を重ねました。昭和53年（１９７８）日本伝統工芸展にて初入選後、同展をはじめとする展覧会で受賞し、鑑査委員を務めています。

紺谷があらわした人物は、古代の衣装をまとう人々を中心に、夕暮れに佇む者、伝統儀礼の楽器を奏で、舞を舞う者、神話の世界に生きる者などです。瞬間を切り取った姿は、静謐でありながら生きる歓びに満ち、心の奥底に沈む古い記憶を呼び起こすような懐かしさを感じさせます。

本展は令和3年（２０２１）に逝去するまで、多くの人々を魅了した紺谷力の作品群を展示し、その制作の歩みを紹介するものです。

紺谷力《彩塑人形「腰鼓遊楽」》 個人蔵

学芸員の眼

紺谷力の彩塑人形は、大変堅牢です。漆塗の敷板に芯棒をしっかりと固定しモデリングしていることにより思い描いたポーズに合わせて、ステンレスの芯棒の形を決め折り曲げるのは容易ではなく、軽やかで力強い作品は、この土台があってこそのものでしょう。

紺谷は若い頃に、堀柳女（「衣裳人形」人間国宝）から聞いた「人形は誰が入手し、どのように扱うか分からない。だから堅牢に作る方が良い」という言葉により、丈夫に作ることの大切さを思い知らされたと語っています。

作品を使う（愛玩する）人の立場に立ち、制作すること。このような作り手の心構えもまた、人形を美術工芸として成立させる要素かもしれません。

前田育徳会尊経閣文庫分館

天神画像と文房具

2月8日(土)～3月20日(木・祝)　会期中無休

菅原道真と聞くと、どのようなイメージを持つでしょうか。平安時代中期を代表する学者、詩人であり、優れた政治家。藤原時平との政争に敗れて大宰府へと左遷され、非業の死を遂げた人物。死後怨霊となり都をおびやかしたのち、神として祀られた「天神さま」。道真公は歴史上の人物であると同時に、信仰の対象として日本の文化に深く根付いています。全国各地に天満宮や天神社が作られ、「天神さま」は、幅広い階層の人々に受け入れられて、今日でも学問の神「天神さま」として親しまれています。

加賀藩前田家は、江戸時代以降、本姓を菅原として菅原道真の子孫を称し、道真公を篤く尊崇していました。文武二道を旨とし、学問にも重きを置く家風は、そのあらわれといえましょう。5代藩主綱紀以来、天神御忌50年の節目にあわせて、藩主たちが北野天満宮へ太刀を奉納していたことからも、その信仰がうかがえます。

道真公の命日にあたる2月25日には、毎年、全国各地の天満宮や天神社で天神さまのお祭りが行われます。本展示でも、前田家に伝わった天神画像を展示し、前田家における天神信仰の一端を紹介するとともに、学問の神さまである「天神さま」にちなんで、文房具の数々を紹介します。

《瑪瑙梅彫筆架》

学芸員の眼

展示の冒頭を飾る《胞輪(ほうりん)天神画像》には、由緒書が附属しており、そこにはこの作品にまつわる不思議な言い伝えが記されています。

この天神画像は道真公自筆の伝承があり、もともと吉田某の所持でしたが、しばしば霊異が現れたため、富岡八幡宮に納められました。その後、慶安年間に天台僧の實圓に贈られ、さらに寛文9年(1669)に三河の鳳来寺にもたらされたといいます。時は流れて文化4年(1807)9月17日の夕方のことです。胸騒ぎのした鳳来寺の僧は自分の房にあったこの天神画像を別の場所に移しました。するとその晩、もとの房が火事で燃えてしまったのです。

この天神画像がその後どのようにして前田家に入ったのかはわかりませんが、霊験あらたかな御像として珍重されてきたことでしょう。

《胞輪天神画像》

古美術（第2展示室）

浮世絵にみる魑魅魍魎

2月8日（土）～3月20日（木・祝）　会期中無休

「魑魅魍魎（ちみもうりょう）」とは妖怪や化物を総称した言葉です。今回は当館所蔵の浮世絵のうち「魑魅魍魎」を扱った作品を一挙にご紹介します。

中世において妖怪の出現は凶兆とされ、人間にはどうすることもできない超越的な存在として恐れられていました。しかし近世以降、貨幣経済や自然の脅威と無縁な都市生活が広まり、妖怪への恐怖やリアリティが薄れていきました。神霊の支配力から解放された18世紀には、物それ自体に注目する本草学や博物学が広まっていき、様々な自然物を収集し分類するようになりました。妖怪も一種の生き物のようにとらえられ、18世紀後半には鳥山石燕（とりやませきえん）が一頁につき一種類の妖怪を描いた『画図百鬼夜行』シリーズを刊行します。まさに図鑑のような構成であり、妖怪が〝もの〟として、表象として認識されるようになったことがわかります。また、黄表紙と呼ばれる絵入りの読み物には、キャラクター化した妖怪が登場します。そのような背景もあり、妖怪を主題とし娯楽の対象として扱った浮世絵が数多く見受けられるようになり、幕末から明治にかけて妖怪文化の人気が高まっていきました。

今回は、幕末の人気浮世絵師・歌川国芳とその弟子の月岡芳年を中心に、江戸末期から明治にかけての魑魅魍魎を描いた浮世絵を、典拠となったエピソードとともに展示します。妖怪たちの奇妙な姿やユーモラスな表情といった表現のみならず、その背景にある物語もぜひお楽しみください。

歌川国芳《源頼光公館土蜘作妖怪図》

近現代絵画・彫刻（第3・4・6展示室）

優品選

2月8日（土）～3月20日（木・祝）　会期中無休

まだまだ寒さ厳しく、春が待ち遠しい日々。日本画分野から「春のさきがけ」を展示します。2月は如月。如をなす月とは古代から中国に由来する言葉で、万物が神意に従うように現れること。そこに衣を更に着る「きさらぎ」の音を当てています。そして草木がいや生い茂る弥生3月へと移ります。日本人の感性に寄り添う、日本画家の美意識をご覧ください。

油彩画分野では、叙情豊かな白銀の世界を描いた、判三教《待春》をご紹介します。寒中に葉を落とした枯木と上空を舞う鳶を見つめ、一人たたずむ少女は何を思っているのでしょうか。画面の奥に広がる雪深い大地に、やがて訪れる春の芽吹きを想像させます。今回は優品選とあわせて小特集「珠玉の個人コレクション」を展示します。また、大正期を中心に帝展や文展に複数回入選し、石川の洋画壇の先駆者として活躍した伊東哲の水彩画も展示します。伊東は帝展出品作品で不評をかったことから画壇から退き、台湾や中国を制作の場にしています。今回は日本に戻った晩年制作の、微細な世界を覗き込んだような抽象画の世界をお楽しみください。

彫刻分野からは吉田隆《風景の中の竪琴》をご紹介します。樹木と佇むペガサス、竪琴を持つ人物を、立体とレリーフの組み合わせにより表現した作品。竪琴を持つ人物の、つるりとした幾何学的な顔が目を引きます。作者が表現する特徴的な造形とロマンに満ちた静謐な雰囲気をお楽しみください。

吉田隆《風景の中の竪琴》

展覧会回顧

特別展「食を彩る工芸」

令和6年11月9日（土）～12月8日（日）

本展は石川・金沢の食文化を彩りあるものにしている工芸作品に着目し、さまざまな食のシーンでどのように用いられてきたかを2部構成で紹介しました。

第1部は、「もてなす心」、「自然を尊ぶ」、「菓子を愉しむ」という3つのトピックから石川の食文化と工芸の関係に迫りました。それぞれ、ハレの日に用いられた食器や四季を楽しむ器、お茶席や茶屋での設えに用いられる道具など、積年の伝統が作り上げてきた工芸品をテーマに沿って紹介する内容でした。展示作品は、県内の料亭や旅館を中心に選びました。民間にこれほどの優品が数多く残されているのも、伝統を大事にする土地柄だからこそかと、思わずにはいられませんでした。

第2部では、工芸王国いしかわの次代を担う気鋭の工芸作家である、多田幸史氏、中田博士氏、見附正康氏、宮本雅夫氏（以上、陶芸）、田中義光氏、水口咲氏（以上、漆芸）、坂井直樹氏（金工）、中嶋武仁氏（木工）の8名が、この展覧会のために1年の歳月をかけて制作した、食を彩る新作を紹介しました。「食」をテーマとしつつも、作家の持ち味が存分に発揮されている新作は、思わず手に取ってみたくなるような素敵な作品でした。

「食文化」とそれに欠くことのできない器などの工芸作品を通して、石川の文化の厚みと歴史の深さを提示することができたのではないかと思います。

友の会ツアー報告

信濃の美術館をめぐる

令和6年10月19日（土）、20日（日）

紅葉が美しい10月下旬、すっきりと晴れた空の下で実施した令和6年度友の会ツアーをご報告いたします。

今回は「信濃の美術館をめぐる」と題し、当館とつながりの深い脇田美術館を軸に、上田市・軽井沢町の美術館をめぐりました。

1日目は上田市内の戦没画学生慰霊美術館「無言館」、安楽寺、上田城跡、上田市立博物館を訪問しました。参加の皆さんの多くが訪問を楽しみにしていた無言館では、設立の経緯や石川県立美術館とのつながりについて、館長の窪島誠一郎氏からお話を伺いました。心のこもった講演に、涙する参加者も見受けられました。

2日目は軽井沢町の軽井沢千住博美術館、脇田美術館、軽井沢安東美術館をめぐるとともに、旧軽井沢地区での自由散策も楽しんでいただきました。脇田美術館では、画家・脇田和のご子息である館長の脇田智氏、学芸員の岩田希美氏より、脇田和との思い出、展覧会や作品についてお話しいただきました。また登録有形文化財に指定されている脇田和のアトリエ山荘を特別に見学させていただきました。

宿泊を伴う友の会ツアーの開催は約5年ぶり、かつ初めての新幹線利用ということでしたが、皆様のご協力もあり大きなトラブルなく、無事終えることができました。誠にありがとうございました。今後も皆様に魅力的と思っていただけるようなイベントを企画しますので、ぜひご参加ください。

上田城にて

第7展示室

令和6年度 金沢大学人間社会学域 学校教育学類美術教育専修 卒業制作展覧会

2月13日(木)～16日(日)　会期中無休

絵画・彫刻・デザイン・美術教育（美術史）の各分野の学士課程による令和6年度卒業制作作品を展示いたします。

これらの作品は主に教職を目指す学生が、地道な努力と創造的な研究の成果として制作し完成させたものです。未熟ではありますが、自身の4年間の大学生活の集大成として制作いたしました。ぜひ、ご高覧ください。そしてご意見・ご感想など賜れますと幸いです。

なお、在科生の作品も展示いたします。あわせてご高覧ください。

◇入場無料

◇連絡先　金沢市角間町　金沢大学
人間社会学域学校教育学類　江藤望
電話：076－264－5582

第8展示室

第13回 石川県日本画会

2月13日(木)～17日(月)　会期中無休

石川県日本画会はその趣旨を「日本画を志すものが、これまでの既存的概念や会派にとらわれることなく、自由で新しい発想によりそれぞれの日本画制作をすることを目的とし、会員相互の協力によってその研究・模索と石川県内での発表の機会を設け、自己の研鑽に努め、石川県の美術文化の発展に寄与する」とし、13回目の展示発表を行います。

若手からベテランまで年齢層は幅広く、モチーフも風景や静物、人物・動物や植物、具象や抽象など多岐にわたり、その視点や表現方法は個性豊かです。ぜひ、この機会に石川県内の日本画家の意欲作をご覧ください。

◇入場無料

◇連絡先　石川県日本画会事務局　石崎誠和
金沢市小立野2－40－1
電話：076－262－3522

第9展示室

風の会第8回展

2月13日(木)～17日(月)　会期中無休

春の風にフワリと浮かぶ雲。タンポポの綿毛がフワフワと飛び、モンシロチョウがヒラヒラと舞う。夏の河岸では飛び交うホタルの群れ。頬をなでるここちよい風等を考えている時に、ふう（風）を思い付き、また、全員の気持ちが一致しました。自由で新しい発想による絵画制作を目的として2016年より石川県在住の作家をはじめ、モデルをお願いしている金沢美術工芸大学の学生も含めたメンバーで作品発表の機会を設けています。

抽象、具象を問わず、それぞれの視点や表現が個性豊かに現れていることと思います。ぜひこの機会にご覧いただき、ご指導いただければ幸いです。

◇入場無料

◇連絡先　江守マリ子　金沢市長町1丁目3－36
電話：076－221－3588
辰村浩子
電話：090－3297－5361

第8・9展示室

第30回 北陸国展

2月20日(木)～24日(月・振休)　会期中無休

北陸国展は北陸在住の国展出品者を中心に構成され、今年で30回展となりました。

国画会（国展）は昨年98回を迎え、毎年春に国立新美術館で開催される歴史ある公募団体です。草創期の絵画部には梅原龍三郎、香月泰男らが、写真部には野島康三、木村伊兵衛らがいました。

北陸国展での成果が毎年、国展での受賞者輩出につながっています。今回は絵画部17名、写真部12名が力作、大作を若手の新作も交えて約40点発表いたします。是非ご高覧下さいますようお願い申し上げます。

◇入場無料

◇後　援　北國新聞社、テレビ金沢

◇連絡先　北陸国展事務局　横江昌人
能美市秋常町ニ5－1

2月の行事予定

■土曜講座

①「前田家の天神信仰」
日時　2月8日（土）　13時30分～15時
講師　村上　尚子（学芸専門員）

②「浮世絵にみる魑魅魍魎」
日時　2月15日（土）　13時30分～15時
講師　鈴木　彩可（学芸員）

③「紺谷力の仕事」
日時　2月22日（土）　13時30分～15時
講師　寺川　和子（学芸第二課長）

いずれも会場は石川県立美術館講義室
聴講無料、申込不要

第7展示室
令和6年度
一陽会石川支部WEB展覧会

2月20日（木）～24日（月・振休）　会期中無休

一陽会は「清新にして深奥なるものの創造に勉励し、新時代の美術を推薦とする。先鋭なる未完成こそ推薦し、前人未到新分野の確立に努力するものである」、この精神をふまえ、日々研鑽努力してきた渾身作を展示いたします。美術愛好家の方々にご高覧いただいて、ご教示いただければ幸いに存じます。

昨年秋、六本木の国立新美術館で開催されました第70回記念一陽展（10月2日～14日）に出品しました石川県在住・出身作家の絵画・彫刻作品あわせて21点を展示し、若い世代にも気軽に作品に親しんでもらえるよう二次元コードを読み取れば、支部のホームページや作品の解説等もスマホで見られます。

◇入場無料
◇連絡先　一陽会石川支部支部長　竹田明男
電話：076－248－5989

友の会予告

令和7年度の友の会会員を募集します。次号（3月・497号）で募集情報を掲載し、手続き書類をお届けいたします。入会受付方法が例年と異なりますので、ご注意ください。

入会受付は美術館正面入り口にある総合案内で行います。入会受付のための混雑を避けるため、3月中のご入会は郵便振替のみの対応とさせていただきます。来館での入会を希望される場合は、4月1日（火）以降にご来館ください。

なお、3月中に来年度も継続してご入会いただいた方には、当館オリジナルポストカードをプレゼントいたします。

◇会費　2，000円
◇受付期間　郵便振替：**令和7年3月1日（土）より**
　　来　館：**令和7年4月1日（火）より**
◇会員証の有効期限：令和7年4月1日～令和8年3月31日

対話で！作品鑑賞会

ご参加のみなさまで対話をしながら、コレクション展示室で作品鑑賞を行います。作品への知識はいりません。よく見て、おしゃべりしながら、ゆっくりと美術館で過ごしてみませんか？

＊作品解説ではありません。

日時　2月9日（日）14時～14時30分
　　＊申込不要
集合場所　2階 コレクション展示室前
定員　10名程度（先着）
対象　どなたでも
料金　要コレクション展観覧料
　　＊友の会会員のみなさまは、会員証のご提示で無料
担当　当館学芸員

※画像はイメージです。鑑賞する作品は、当日までのお楽しみ！

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.84

《木彫加彩人形「つつ井筒」》もくちょうかさいにんぎょうつついづつ

幅28.3　奥行15.7　高18.0（cm）
昭和56 年（1981）

下口宗美　しもぐちそうび
明治37年（1904）～昭和59年（1984）

鮮やかな彩色に金銀の箔を散らした桐の一木造りで、平安王朝様式の風俗衣裳をまとう幼い男女を表した、木彫加彩人形です。男児は鳥の玩具を、女児は大きな牡丹の花を持ち、男児の左手は女児の背中に添えられています。ふっくらとした三等身の幼児体形、顔立ちもこどもですが、目元は涼し気で品格があり、どことなく大人びた印象も感じさせます。

本作は『伊勢物語』第二十三段「筒井筒」に題材を取った作品です。井戸を囲む竹の枠（井筒）の周りで共に遊び、密かに想い合っていた幼馴染の男女は長じて結ばれましたが、両親が亡くなって貧しくなった妻の家から、男は足が次第に遠のくようになります。ほかの女へ通うときにも、夫を笑顔で送り出す妻を訝しく思った男は、夜半に出かける夫の身を心配する歌を詠む妻を目にします。その様子と幼い頃の二人の思い出に思いをはせ、男は妻のもとに戻るというあらすじです。いつの世も人の想いは、一筋縄ではいかぬものです。

下口宗美は加賀市生まれ。明治～大正期の九谷上絵の名工・初代中村秋塘に師事して陶芸を学びました。その後京都で素焼き人形の北村祥鳳に師事。昭和21年（1946）に帰郷し、木彫人形作家として活動を始め、同24年（1949）の第1回現代人形美術展にて特選受賞以後、日展・日本伝統工芸展を中心に活躍しました。古典文学を主題とし、一木造りによる造形的な力に満ちた、詩情豊かな作品を発表し、また石川県における人形作家の先駆者として紺谷力をはじめ後進を指導しました。

次回の展覧会

令和7年3月25日（土）
～4月14日（月）
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第２展示室
溶姫の婚礼調度	岸派の絵画

第3・4・5・6展示室
第81回現代美術展 ―日本画・工芸・書―

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円（290円）
大学生　290円（230円）
高校生以下　無料
※（　）内は団体料金
2月3日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間
午前9:30～午後5:30

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00

2月の休館日は
4日（火）～7日（金）

石川県立美術館だより
第496号（毎月発行）
2025年2月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。